

國學院大學學術情報リポジトリ

Hiroaki Matsumoto, The creation of Shinobu
Orikuchi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Hosaka, Tatsuo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000137

〔書評〕

松本博明著 『折口信夫の生成』

保坂達雄

本学折口博士記念古代研究所の研究員として長らく在籍した松本博明氏の、待望の著書が刊行された。『折口信夫の生成』と題されたこの書名には研究対象に向かう著者のどのような方法が意図されているのか。研究所に残された膨大な資料と格闘しながら、折口一筋に研究されてきた著者の成果はどのような方法から導きだされてきたのか、非常に興味深い。まずは内容を簡単に紹介しながら、著者の方法によって折口信夫研究のどのような地平が切り開かれたのか、見てゆきたい。

全三章十九節からなるが、第一章「短歌の行方——様式・非短歌・生活・律・虚構」では釈道空の短歌をめぐる問題が、第

二章「折口信夫 小説の意味——視覚と聴覚の交錯」では「生き口を問ふ女」を主にして小説を、第三章「『古代研究』への道」では語部論の発生から金澤庄三郎や柳田國男との関係、さらには「古代生活の研究」にスポットが当てられ、その生成過程が追究される。以下、各節ごとに見てゆく。

第一章第一節「旅——短歌と学問とを架橋するもの」では、昭和五年の東北旅行、奥熊野の旅、三信遠の旅を取り上げ、「折口信夫の旅は、民俗へのまなざしを獲得させただけでなく、それを土台にして文学発生論の舞台と、そしてそこで発せられるはずの語彙を学問研究の中に実体化してゆく」旅であった

と、その旅の意味について説く。

第二節「叙事詩」と「語部」について——「折口語彙」の「相対化」では、キーワードによって折口学説を整理するこれまでの方法は、折口語彙に特権を与えてしまう研究方法であり、読者の多様な読みのあり方を阻害するとして批判。折口語彙といわれる言葉の一群を同時代研究の水準のなかで捉え直し、それらがどのようにして折口語彙として進化を遂げてきたか再検討する必要があるとする。その一例として「叙事詩」という語彙を例に挙げて、明治二十七年創刊の『帝国文学』から上田敏・生田長江・姉崎正治・岩野泡鳴らの議論を辿り、その用法を検証し、同時代的文脈のなかに折口信夫の「語部」論生成の過程を跡づける。またこれに続く第三節「詩の内容と形式」では、「詩の内容は音律である」とする岩野泡鳴の叙事詩論から、「和歌批判の範疇」や「言語情調論」に展開された折口の「詩の内容と形式論」は、「岩野の形式内容二元論とそれを取り巻く状況の中から生まれてきたことは確実であろう」と、同時代的関係を指摘する。このように明治・大正期における近代文学あるいは文化研究の状況の中に折口の語彙や言説をもう一度埋め戻し、そこから折口を発見しようとする。

釈道空が短歌形式への懐疑から新たな詩形を模索したことは

よく知られている。第四節では、道空の「非短歌」への試みとして、「日刊二新聞」掲載の「道空集——ひとりして」や自選歌集『ひとりして』に既に字空けや句読点が見られるとし、「短歌に句読点を入れるという営為は、道空に始まったことではなく」、与謝野鉄幹『東西南北』や道空の短歌の師でもある服部躬治から学んだものであるとする。また四句詩形に関しても、一行に書かなくてもいいとする石川啄木の発想法に大きな影響を被っていると述べる。ここにおいても、明治・大正という時代のなかで折口の言説を相対化しようとする。

第五節「非短歌」と東北探訪」では、昭和五年から十年にかけて五回にわたって探訪した東北地方の冷害と凶作に苦しむ社会状況を克明に追いながら、「水牢」「貧窮問答」「東京を侮辱するもの」から「追悲荒年歌」を生み出すに至る昭和十年前後の作品がいかに東北の惨状・悲劇と関わっているか論述し、道空の「非短歌」は短歌様式そのものへの懐疑であり、抒情からの離脱の試みだと指摘する。即ち、あまりにリアルな悲惨な状況に直面して、道空はこれまでの短歌様式では表現し得ないと実感したとする。

第六節「うみやまのあひだ」の変相」では、大正元年から大正十四年までの「うみやまのあひだ」のテクスト十六種類を

挙げ、このテクストの変相こそが「うみやまのあひだ」成立の本質的意味だとして、逍空の「個的な感傷」から始まったこの連作は、「うみやまのあひだ」に生きる他のひそやかな生への限らない共感という回路を通して、次第に浄化され普遍化されて、彼の学問的営為の背骨を形成するテーマへと持ち上げられていった」と結ぶ。第一章最後の第七節「分節する歌集——『天地に宣る』論」では、評価の分かれる戦争歌の問題にし、「開戦、シンガポール陥落といった事件、あるいは自身の教え子の入隊という現実に触発されて歌われる前半部と、戦争を受け入れながらも、日々の生活が粛々として営まれて怯える「市井山沢」の人々への祝福と鎮魂の歌によって構成される後半部」とが対比的に構成されているとし、このような「異質な歌が交錯する」ところに、この歌集の時代的な意味を読み取らねばならないと説く。

第八節「未刊行本『歌虚言』——「虚構」の問題」では、折口博士記念古代研究所に残されていた『歌虚言』という稿本を取り上げる。この稿本は昭和十二年刊行の『短歌文学全集 釈逍空篇』を解体し、一部は残しながら新たに連作歌、詩、評論を加えて編集し直されたものである。著者は未刊のままになっていたこの原稿を折口資料のなから掘り起こし、これは硫黄

島で戦死した養嗣子折口春洋に対する慰霊の書として纏めようとしたものであり、ここには新しい歌物語の生成に向けた虚構への希求が認められるとする。

第二章「折口信夫 小説の意味——視覚と聴覚の交錯」では、新全集に初めて収録された「生き口を問ふ女(続稿)」「寅吉」草稿(一)「夜風」などを組上に載せる。いずれも著者が判読翻刻した作品群である。第一節「生き口を問ふ女」の構想、第三節「生き口を問ふ女」の続稿」では、これまで怪談咄として読まれてきた「生き口を問ふ女」を取り上げる。この小説では正妻お留の生き霊が夫卯之松と妾おちかを襲う話のように描かれているが、折口信夫が残した大量の原稿の書きさし、書き損じの中から、その「続稿」に相当すると推定しうる本文を丹念に拾い集めて復原。その本文を具体的に紹介して、単なる怪談咄ではないことが明らかにしたとする。また第四節「生き口を問ふ女」と「神の嫁」では、「生き口を問ふ女」に横溢する「見る」行為には、日露戦争後に流行した高浜虚子などの写生文小説の手法の影響があるとし、聴覚を通して音だけを描く「神の嫁」と対比しつつ論じている。「死者の書」のテクストとその生成」と題された第五節では、「死者の書」は「神の嫁」のモチーフである「姫の失踪」を引きずった形で語り始

められたとしたりうえで、『日本評論』版から青磁社版への章段改編と夥しい数の推敲の跡を具体的に例示する。

第三章は「『古代研究』への道」と題して、折口古代学の生成に焦点が当てられる。第一節「語部論」の揺籃——折口信夫の発生」は、折口が購読を始めたと推測される雑誌『帝国文学』の明治三十一年から三十九年までの収録論考を精査し、そこには文字よりも音声を優先する論考が多いとして、折口の語部論はこうした『帝国文学』をはじめとする同時代の学問的潮流と無縁ではなく、むしろそれを積極的に受け入れていたとする。また『国史総覧稿』出版を記念した重野安繹の講演を聴いた後に記されたと推測されるノート四ページの「語部の説」を全文翻刻紹介し、この「語部の説」から「国民詩史論」の語部論へと飛躍的に展開されていったと指摘する。

第二節「わかしとおゆと」——折口信夫と金澤庄三郎」は、新全集に初めて収められた、原稿用紙六十三枚からなる草稿「用言の発展」を取り上げる。これまた松本氏によって翻刻されたものであるが、この草稿は國學院の学生時代に金澤庄三郎に提出された単位論文であり、金澤の動詞形容詞一元論に対する折口の批判論文であるとす。その上で、この「用言の発展」の中から「わかしとおゆと」の箇所を全文引用し、その草

稿と明治四十一年六月に雑誌『同窓』に発表された論考「わかしとおゆと」を比較することによって、「師説を批判しようとする若い折口の気負いと、反面、師に対する躊躇」という師金澤に対する折口の「屈託」する感情を追う。

第三節から第五節は柳田國男と折口信夫との関係を細やかに描写した論考群である。第三節「『古代研究』と国学の再興——折口信夫と柳田國男」では、古代研究所に残されている折口宛柳田國男書簡六十一通（うち四十八通が『定本柳田國男集』に未収録）のやり取りから、「緊密できめの細かい」二人の關係を読み取り、折口が柳田から受け継いだテーマは「新しい国学をおこすこと」「国学の立て直し」という課題であったとする。第四節「昭和五年の折口信夫——東北・新野探訪の意味」では、『古代研究』の礼状として柳田から受け取った書簡を根拠に、「故に小生らが巫女考等に書いた（中山君等が今もやつて居る）やり方をば曾て一度もフォクロアと呼びたること無之候」とある一節から、柳田は「フォクロア」を採集を専らにした学問であったと捉えたが、それに対して折口は「民俗学」と「フォクロア」を柳田ほど深くは考えていなかった節があったと指摘。『古代研究』刊行後に旅立った昭和五年の東北旅行は、その柳田の批判を受けて「何らかの行動を迫られた」結果の旅

行であったのではないかと推測する。第五節「柳田國男の「郷土」と折口信夫の「郷土」では、両者の「郷土」観の相違を問題にする。折口の「郷土研究」は、「日本人の古い相を知る為」の「古代研究」であったのに対して、柳田が「山」に求めていたものは再構成された「郷土」であり、「山人」の発見は「郷土」「郷土人」の発見に他ならなかったとする。また折口が主宰した雑誌『土俗と伝説』は『郷土研究』の路線を踏襲したものであり、柳田の「郷土」「郷土研究」の思想を引き継いだものだと位置づける。

第六節「古代生活の研究」本文成立をめぐって」では、折口古代学の中核をなす「国文学の発生」生成の歴史を考察する。大正十二年夏の沖繩採訪を終えた頃から、折口は『日本文学の発生』の刊行を目指していたとし、この『日本文学の発生』のために書かれたと思われる原稿が、「ししま」から「こと、ひ」「へ」、「とこよ」と「まれびと」と、「ほ」「うら」から「ほがひ」等の著者によって翻刻発表された草稿類、及び『日光』掲載の「日本文学の発生」の副題をもつ論考群だとする。後に『改造』大正十四年四月号に掲載され、『古代研究』民俗学篇一に採録された「古代生活の研究——常世の国」は、一連のこれら草稿のうち、「とこよ」と「まれびと」に加筆訂

正と削除を行って成立した論考であったことを、両者の本文の比較検討によって明らかにし、『古代研究』に至る生成の過程を跡づける。

ここまで本書全体の内容を見てきたが、多くの論考が考察の根柢に据えているのは、折口博士記念古代研究所に保存されていた新発見の資料群であり、いずれも著者によって翻刻されたものである。すでに『折口博士記念古代研究所紀要 別冊資料集』（平成四年十月）、『折口博士記念古代研究所紀要 別冊資料集』第二輯（平成六年二月）、また新編集の『折口信夫全集』等で公開されているが、こうした多様にある折口のテクストを比較対照しつつ、その思考の展開の跡を探り、定稿化への過程を考究したのが本書である。書名に『折口信夫の生成』と標榜された方法とは、このように折口信夫の思考とテクストの生成過程を、草稿や原稿、その他ノート類などを通して追尋解読してゆく研究であり、日常的に折口資料を閲覧しうる立場にあった著者にしかなしえない方法だったといえよう。とはいえ筆者も経験しているが、折口自筆の草稿やノートなどは書き込みや書き直しなどが多く、判読が非常に困難である。資料の側近くに身を置く立場にあったからとはいえ、地道で時には判読に何か月もかかるような作業は誰にでもなし得るものではない。

しかもこの生成論的研究方法は、実は折口信夫の思想そのものである発生論とも響きあうものなのである。折口は文学も民俗も生成し変容する過程の一断面と捉え、テキストを絶対化しない。テキストには過去からの時間と未来へと繋がる時間が流れている。このように考えるのが、折口信夫のテキスト観である。そうしてみると、著者の研究方法は研究対象である折口自身の思想から必然的に導き出された、折口信夫という対象にアプローチするのに最も適切な方法だったともいえる。これまでこのような方法に基づく研究が皆無だったことの方が不思議のように思えるが、多くの研究者は『折口信夫全集』から出発するしかないのである。

著者が発掘した新資料の恩恵に浴した研究が、一部の研究者によって既に進められているが、著者のもとには判読翻刻を待つ、未解読の資料類が数多く残されているという。判読作業はなかなか容易ではないことを重々承知の上での願望であるが、今後さらなるテキスト化が実現するならば、折口がいかに思惟と思考を重ねながら自己の学説を創り上げていったのか、さらに微細に解明されてゆくことになるのではなからうか。

(A5判、三七七頁、おうふう、二〇一五年三月発行、定価九八〇〇円＋税)